

## 国語科教材としての連句の有効性

お茶の水女子大学附属中学校

宗我部義則

五七五と七七の句を交互に連ねていく中で、自然や人情を描いていく連句は、実は国語科の教材として多くの魅力と有効性を備えているのではないか。以下、国語科教材として開発中の「連句創作の授業」を提案する。

### (1)これまでの研究の経過と教材化の視点

- ①実作実験……………入試中心日に、中学3年生の一部を対象に試験的に導入。
- ②授業への導入……………連句創作の授業の基本的指導展開を探る。
  - ・理解と表現が一体化した定型詩の創作としての側面を重点に。
- ③対話への着目……………共同創作としての特長を生かす。
  - ・創作過程で成立する対話の学習をより有効にすることに焦点。
- ④視点論の導入……………創作法として伝えられる「句の人情（視点）」を扱う。
  - ・句の視点を意識した句の読みと創作の学習を設定する。
  - ・3年間のカリキュラムの中での学年段階の付け方を探る。
- ⑤歌仙の創作……………本格的形式への挑戦（選択教科国語8名）
  - ・本格歌仙への発展、LANの活用（CSCWの国語科への導入）
- ⑥発想を広げる……………創作へ一連となった「読み」を意識化させる。

※①1992. 2(3年) ②1992. 3(2年) ③1994. 3(1年) ④1994. 12(2年) ⑤1995(3年)

⑥1996. 7(1年) ……③④⑤は同じ学年の生徒

### (2)これまでの研究からみた「国語科教材としての連句の有効性」（主なもの）

- ① 理解（前句の読み）と表現（付句の創作）が一体となった学習の場を生み出す。
- ② 言葉の多義性を積極的に生かして、発想を育て、自由で主体的な読みを引き出す。
- ③ 虚構を楽しみつつ視点や効果的なレトリックを意識した学習の場が成立する。
- ④ イメージの定着過程で、言葉への関心を高め、言語感覚を磨き、語彙を拡充できる。
- ⑤ 折々の風景や人情の機微など、生活の中にある詩性を再発見する体験が成立する。
- ⑥ 共同制作の中で、コミュニケーションの喜びをもって言葉とふれあえる。
- ⑦ 仲間の前に自分や自分の言葉を開き、仲間たちの新たな一面を発見する。